

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

「ふるさと」っていいね----- 斎藤 雄 出雲と佐倉 ----- 富田 栄
蟻螂の死----- 林 久子 父と柿----- 都築 洋子

西行 桜と旅と弘川寺

岡 本 治 之

西行終焉の地、弘川寺ひろかわでらは河内（大阪府）にある。近鉄長野線の富田林駅から2時間に1本の河内行のバスに乗り、葛城山の麓を回り込んで終点まで行く。市街地を過ぎると乗客は私だけになった。

弘川寺を訪れたのは2月中旬である。バス停から寺は近くのはずだが、人に会わず少し不安になったころ、立派な下馬石と風格のある寺の構えがみえてきた。本堂の脇から山径を上り、桜山に登った。眼下に富田林の街並みが広がる。さすがに桜は咲いていなかったが、桜並木の間に季節外れのピンクのつつじがちらほらとかわいく咲いており、少しだけ春を感じた。

西行墳の前に「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」の歌碑がある。これは西行が死を目前に

して歌ったものではないが、自分の死をこのように希求していたのだろう。西行の入寂は文治6年（1190）2月16日73歳であった。西行はこの歌どおり、最愛の桜のさかりに満月の下で釈迦の涅槃に従うように往生した。その最期は、慈円や藤原俊成・定家も感動して記している。住職は「釈迦の入寂とは1日違いでしたなあ」と話してくれた。

松尾芭蕉は『笈の小文』序文で「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは一なり」とする。さらに『奥の細道』に「古人も多く旅に死せるあり」とある。芭蕉は西行などの漂泊の足跡を追い、西行を自分の文学の源泉として仰ぎ、追慕していたのである。

西行堂の脇に「年たけてま

た越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の歌碑がある。西行の二度目のみちのくの旅は69歳であった。40年以上も前に、初めて小夜の中山を越えた日のことを想い出し「命なりけり」に凝結した境地だろう。西行の到達した境地がわかるような気がした。

西行の墓の前には大きな壺が二つ並んでいる。住職は時期になると桜の花を挿すと言っていた。「仏には桜の花をたてまつれわが後の世を人とはばらばら」西行はここでも願望を果たしている。

バス停でゆっくりと、西行のことを考えながら待った。5、6人の若い母親が集まってきた。やがて幼稚園の送迎バスが着き、子どもたちが元氣よく降りてきた。こんな山奥の里にもこれだけの子どもたちがいるのだ、と思うと明るい気持ちになった。母子はそれぞれの車で帰って行き、バス停はまた独りになった。

（編集委員）

「ふるさと」っていいね

平成24年10月中旬、久しぶりに生まれ故郷の秋田へ旅行して、隣県山形との県境、にかほ市の土を踏んだ。小学3年生から高校卒業迄育った土地である。

南にそびえる鳥海山の裾野に連なる仁賀保高原には、風力発電の羽根が日本海側から吹き寄せる海風に任せて、勢よく回っていた。育った自宅に近い平沢漁港は、晩秋からハタハタ漁が盛んになる。子供の頃、大漁船で威勢よく水揚げされる情景を思い出した。

囲いの中に山と積まれたハタハタを、その場で買うと数匹でたったの百円、今から65年以上昔の事である。

港からすぐ近くに勤労青少年ホームがあり、併設の斎藤宇一郎記念館（地元で農業開発に尽力した名主・私の本家跡地）で、女性職員が最近の

市の動きをくわしく話してくれた。

大手電子工業TDKの発祥の地でもあるにかほ市は、数年前から会社再編の動きに敏感になり、町並は静かな雰囲気である。

親戚の地酒屋「飛良泉」の酒蔵を後に、又舞い戻ってこの土地に住みたい気持ちを抑え、羽越本線仁賀保駅へと向かった。

近頃、何かと便利な筈の都会から逃れ、田舎暮らしをする人が少なくないと聞くが、私も一瞬間の中を過ぎった。

毎年11月下旬に東京にて「にかほ市ふるさと会」が開催され関東在住で合併前の3町、象潟町・金浦町・仁賀保町出身者との再会を楽しみにしている。

―「ふるさと」っていいね―

（石川 斎藤 雄）

出雲と佐倉

我が故郷出雲の松江藩（十萬石）の御姫様が佐倉藩主の奥方であったと聞き、かねがねどんな人か知りたいと思っていた。ふと手にした本（『埋火』秋本喜久子著）がこの疑問に答えてくれた。

文政3年、出雲松江藩七代藩主松平不昧公の娘、幾千子姫は後堀田第四代藩主、堀田正愛の継室となった。正愛は癩癩持ちで夫婦中は良くなかったが、お世継ぎを残さないまま早逝した。わずか20歳で寡婦となり謙映院と号した幾千子姫は、印旛沼の水辺の鄙びた村の風景が宍道湖の水辺の村と似ていると感じていたようだ。

五代藩主には正愛の大叔父で前藩主正時の次男正篤（のちに正睦に改名）が正愛の養子となり就任した。たった5歳年下の正篤の義母になった謙映院は、ほのかな慕情を抱きながら正篤を出世させるた

めの努力を惜しまなかった。実家の松平家からの資金援助や精神的な支援で正篤を支えた謙映院は、正篤が本丸老中職に出世する陰の大功労者であった。

話はそれるが、堀田家の分家下野野藩主で謙映院の叔父にあたる堀田正敦は、西洋の事情や学問を正篤と謙映院に教えた。このことが後に正篤の蘭学奨励に繋がったのは確かかなようだ。

謙映院は59歳で故郷出雲を思いつつ静かにその目を閉じたとある。謙映院の父不昧公は佐倉ゆかりの雷電のお抱え藩主でもあった。このように出雲と佐倉の繋がりを輝かせた謙映院様に私は感動した。甚大寺の堀田家の墓所に松平家の紋章の入った謙映院の墓と筆塚があり、幾千子の句灰がちに埋火なりぬ鶏のこえ

が彫り込まれている。私は墓前に花を手向けて合掌した。

（上志津 富田 栄）

かまきり 蟻螂の死

庭の落葉を掃いて、ゴミ袋に入れようと塵取りを取りに行くと、塵取りの柄に15匹もある大きな蟻螂がへばりついていた。蛇と蟻螂は大嫌いな私は「あっ」と言って、のけぞってしまって、驚いて家の中に逃げこんでしまった。

2、3日たって雨に濡れた落葉は片づけなければと思、もうあの蟻螂はいないだろうと庭に出てみると、なんと塵取りの柄に前の姿のままでは見えないか。前に見た時は少し足が動いていたが、今日の彼は死んでいるようだった。蟻螂の雄は雌に食われてしまうと聞いていたが、晩秋の今まで生きていたのだから、きっと強い雌だろうと思った。そう言えば腹のまわりが少しふくらんでいたような気がする。雌だとしたら卵を生まないうちに死んでしまって、子孫を残すことも出来ず、蟻螂

にしてみれば残念に思っただろうなあと、大嫌いな蟻螂が可哀想になった。

それから毎日どうしているかと気になって見に行くが、日毎に緑のからだも色あせて、頭を下にさげてはいるが、でもしつかりと張りついていた。蟻螂大きらいな人をこわがらせた彼女も力尽きたのか、鳥にでも食われてしまったか、10日余り経った日、影も形もなくなっていた。

(稲荷台 林 久子)



父と柿

我が家の柿は消毒しない。隣家の台所近くに植えてあり消毒する気になれない。今年のは病虫害の為か、色づいた後に大部分が落下した。残ったのはたったの9個。表面にすれ傷があるせいか、家族は誰も食べようとしない。自然の恵みに感謝し、夫と毎日朝食

にいただいた。美味しかった。

さて、今年は柿の生り年らしい。例年に比べて安い。スーパーにずらりと並んでいるのを見て、父のことを思い出した。横浜に住んでいた40年

位前の或る秋の日のこと、父の筆跡で柿が届いた。みかん産地の故郷から毎年暮れに送って貰うのはみかんだったから意外で驚いた。ダンボールにぎっしり詰まった柿。当時幼かった二人の娘も大好物だ。父の気持がありがたくて胸がじーんとした。

それからどの位経ったか詳

しいことは忘れたが、暫くして又柿が届いた。近況報告の手紙に柿が美味しかったことを書き添えたからだろうかと、高齢の父にかえて申し訳ないことをしたと心が痛んだが、嬉しかった。いずれも大きくてつやつやの見事な物だった。あんなに柿を堪能したことはない。だが、三度目の柿は来なかった。

自分が年を重ねるにつれ、父と母を思う。旅行に連れて行ってあげたかった。「生んでくれてありがとう」と言いたかった。亡くなってからはおそいのだ。

出来なかった両親への恩返しを家族にしたい。と言っても難しいことではない。「あなたがいるから幸せよ」「生まれてくれてありがとう」これが私の言いたいことだ。ちよつと照れ臭いが。

(白銀 都築 洋子)

3月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鏑木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

佐倉学として印旛沼を学ぶことは楽しいことである。

その昔、40年ほど前、印旛沼の公害問題の研究会に所属していた頃、東京神田の古書店で『印旛沼開発工事誌』が2万5千円で売っていた。当時は給料も安く、財布の中は軽かった。しかし店の主人に予約し、急いで佐倉の自宅に帰ってお金を用意、夕方やつと古書店に戻ってその本を手に入れた。だが今はネットで

簡単に、しかも数千円で手に入れることができる。

また当時『印旛沼開発史』を執筆中の栗原東洋先生宅を数度訪問。ご自宅（物井庵）は鹿島川を見下ろす物井の高台にあった。先生は囲炉裏の前に熱心に語られ、我々メンバーも夜遅くまで拝聴した。現在も印旛沼は多くの課題を抱え、我々に投げかけている。

（西崎 正夫）

あとがき

「あとがき」といえるかどうか？ 心の支えが何か、宗教にみえてみる。世界宗教の最も大切な言葉をみると、

ユダヤ教—正義

イスラム教—戒律、規則

キリスト教—愛（許す）

仏教—慈悲、智慧

儒教—仁・義・礼・智・信

日本人が好む言葉が沢山入っており日本人に宗教心が無いとはいえない。一方、札幌農学校のクラーク博士の言葉を再度みる。

少年よ大志を抱け

金の為の大志でなく

利己的な欲望を満たす大志

でなく

はかなく消える名声を求め

る大志でなく、人間として

あるべきすべてのものを求め

る大志を抱きたまえ

キリストと日本のために

人は何の為に生きるかという面もあわせ、「あとがき」にかえさせていただきたい。

（太田 誠一）